

## 1500キロ歩いた先に見つけたものとは？

### 『サン・ジャックへの道』

2005年、フランス映画、108分

監督・脚本/コリーヌ・セロー

主演/アルチュス・ド・バンゲルン（兄）

ミュリエル・ロバン（妹）

ジャン＝ピエール・ダルッサン（弟）

DVD/ハピネット



キリスト教の三大巡礼地とされるスペイン西部のサンチャゴ・デ・コンポステーラの大聖堂へ向けて、9人の男女がフランスから1500キロを踏破する姿を喜劇風に描く。

発端は亡き母の遺書。中年の三兄弟が遺産管理人から受け取った遺書には、受け取り条件として、聖地まで3人揃って歩くことがしたためられていた。この三兄弟は、不仲で不倶戴天ともいうべき関係なのだが、170万ユーロを山分けできるなら事情は違ってくる。

兄ピエールは大会社の社長。だが、妻に自殺願望があり、自分は薬に依存して生きており、今回の旅が転機になればと考える。妹クララは高校教員、夫が失業中でカネがほしい。弟クロードはアルコール漬けで、妻にも逃げられた文無し。

この3人が他の巡礼者と共に歩く。彼らもそれぞれにわけありで、疑心暗鬼で出発するものの、なにしろ東京から鹿児島までと同じ距離を歩くのだから、どこかでは協力が必要だ。案の定、三兄弟はののしり合うが、次第に相手に対する心遣いを見せはじめる。同時にそれは自分自身を変えていくことともなる。いつしかピエールは薬を飲まなくても生きられることに気づき、クララは同行するアラブ人青年に言葉を教えることに熱中する。クロードもまたアルコールのないところを歩くうちに健康体へと蘇っていく。

もっとも原始的な「歩く」という手段を使った、究極のロード・ムービー。作者（脚本も演出もコリーヌ・セロー）は「歩く」ことに意味を持たせていると思われる。くしくもピエールが「バスも列車も飛行機もあるのに、なぜ徒歩なのか」というように、文明の利器を拒否して原点に帰ることで、どんな人間的变化がおこるかを模索しているようだ。

言葉を替えれば「現代人が身につけている余分なものをそぎ落としていけば、どのような新たな絆と連帯を構築することができるか」でもある。

哲学的な文明批評や過激な社会批判に踏みこんでいるわけではない。それがこの映画を軽くしているかもしれない。だが軽い問題提起だからこそ、素朴な味わいの人間讃歌になっていることも見逃してはならないだろう。

フランスからピレネー山脈を越えて、スペインの西の果て、すなわちヨーロッパの西端までをロケで撮っているが、その壮大な緑の荒野ともいえる風景に魅せられる。実際にコンポステーラを巡礼した私の友人の話では、もっと荒涼とした自然の中を苦しみ抜いて歩いたそうだが、そのあたりも美しい自然を選びすぐって映し出している。川岸を一行で歩む姿などはいささか美化されているのではと思えるが、フランス風のシニシズム（＝冷笑的な）を意識的にさけて素朴な人間への信頼をあえて強調したいと考えた、作者の意図が示されているように思える。

ただラスト。果たして、三兄弟の母は死んでいたのか？なぜ仲の悪い三兄弟を一緒に歩かせたかを暗示させる意味深長なワンカットが挿入されることで、フランス映画風のエスプリ（＝機知）が効いていてみごとである。

プロフィール

吉村 英夫（よしむら ひでお）

1940年生まれ。映画評論家、愛知淑徳大学教授。早稲田大学卒業後、三重県立高等学校で教鞭を執る。34年の教員生活を経て退職、現在に至る。著書に『完全版男はつらいよの世界』『老いてこそわかる映画』などがある。近刊は『講義録・黒澤明を観る』。